「とりつくろひかゝはる」考: 『蜻蛉日記』本文批 判

今西,祐一郎 ^{九州大学教授}

https://doi.org/10.15017/8944

出版情報:語文研究. 94, pp.53-62, 2002-12-26. 九州大学国語国文学会

バージョン: 権利関係:

「とりつくろひかゝはる」考

——『蜻蛉日記』本文批判 -

,西祐一郎

いうものでもない。
意味をなしているからといって、一途にそれに従えばよいと文を改変してはならない。だが、本文の文字列がとりあえず本文校訂にあたっては、安易に誤字、脱字等を想定して本

歌を贈った道綱母に、北の方から届けられた返歌が、和の変によって失脚した左大臣源高明の北の方に見舞いの長『蜻蛉日記』から一例を挙げれば、安和二年、世に言う安

いときなきてして、うすにひのかみにてまつのえたにつ

けたまへり

意味は文脈に適合するとはいいがたい。

問題は「いときなきて」という状態で届けられたことを記す。問題は「いときなきて」という状態で届けられたことを記す。問題は「いときなきて」という状態で届けられたことを記す。問題は「いときなきて」という状態で届けられたことを記す。問題は「いときなきて」という状態で届けられたことを記す。問題は「いときなきて」

に紛れやすい字形が用いられており、現に国会図書館本、無き」の「き」は「支」を字母とする仮名で、「に」や「よ」宮本ではたしかに「いときなき」とは読めるものの、「いとそこで『蜻蛉日記』のいくつかの写本についてみるに、桂

窮会神習文庫本、松平文庫本などではその箇所は「いとよな

き」である

合「き」以外の可能性についても一考すべきではあるまいか。が、「よ」や「に」と紛らわしい字体であるならば、この場これまで「いときなき」と読まれてきた文字列中の「き」

もっとも「いとよなき」では意味をなさない。では「いとに

ほ物語』や『源氏物語』にも見出される言い回しであった。し」という形容詞を副詞「いと」で強調した表現で、『うつなき」ならどうか。これは「二つとない」を意味する「二な

もっともふさわしい表現であるということができる。(キサート)そして何より「いとになき」は『蜻蛉日記』の当該箇所に

を墨守して事足れりとする解釈が、まだまだ横行しているの対して、千年前の言葉に対する感覚の鈍さから、その文字面転々書写を経て本文の変動少なからぬ中世、近世の写本に

_

ではあるまいか。

ここ十年余り国司を歴任し、在京時も道綱母邸とは別の邸に記事がある。母の死後、兼家の訪れも間遠になり、父倫寧は『蜻蛉日記』上巻 康保三 (九六六) 年秋に、次のような

まならぬ道綱母邸の有様を述べる一文である。住む生活、そのような状況下の人手を欠いて屋敷の整備もま

に心ぼそう思ふらんなど深う思ひよらぬなめりなどちぐくのみなりゆく。これをつれなく出で入りするは、ことかゝる所もとりつくろひかゝはる人もなければいと悪し

さに思ひ乱る。

子は次のように述べられる。『源氏物語』橋姫巻で、時勢に見放され落魄した八宮邸の様通常「とりつくろふ」だけで事足りるのである。たとえばという語にある。「邸の手入れをする」というような意味は、という語は、「邸の手入れをする」意で用いられている「とり問題は、「邸の手入れをする」意で用いられている「とり問題は、「邸の手入れをする」意で用いられている「とり

顔に青みわたれる。ふ人もなきままに草青やかにしげり、軒のしのぶぞ所えぶ司なども、むねむねしき人もなかりければとりつくろ

彦は青みれたれる

「つくろふ」というのが普通であった。また、『蜻蛉日記』では、同様な意味を表す場合、たんに

もろともに出でゐつゝつくろはせし草なども、わづらひ 修理し、

に咲き乱れたり。 (康保元年七月)しよりはじめてうち捨てたりければ生ひ凝りていろ <

に、あまた若苗の生ひたりしを取り集めさせて……。先つ頃、つれぐ〜なるまゝに草どもつくろはせなどせし

呉竹も一筋倒れてはべりし。つくろはせしかど。撫子の種取らんとしはべりしかど、根もなくなりにけり。(天禄元年六月)

(宇治ノ院ハ師氏ガ) あはれに心にいれてつくろひ給ふと(宇治ノ院ハ師氏ガ) あはれに心にいれてつくろひ給ふと

聞きし所ぞかし。

(天禄二年七月)

した。

それによって「とりつくろふ」や「つくろふ」だけでは表現というような表現になっているのか。「かゝはる」を添え、とすれば、かの箇所のみが、何故「とりつくろひかゝはる」

この「とりつくろひかゝはる人」は、これまでの注釈では、できないような内容を述べているとは思えないのであるが。

(日本古典全書)

修繕し、

世話をする人

19理し、気にかけてくれる人

(全注釈)

修理し世話してくれる人 (全集)

という風に解されて、「かゝはる」が添えられていることに

(後述)。 の意。和文には珍しい語」と指摘しているのは注目されるの意。和文には珍しい語」と指摘しているのは注目される本古典文学全集が頭注で「かかはる」について、「関係する、対しては、格別な注意が払われることはなかった。ただ、日

唯一例を、次のような意味の初出として掲出するものが出現も「かかは(わ)る」の用例として、この『蜻蛉日記』中のこのような『蜻蛉日記』注釈の大勢を承けて、国語辞書に

他とかかわり合いになる。 (日本国語大辞典)ある関係を持つ。世話をしたり、仕事に従ったりして、

関係を持つ。世話をしたり干渉したりする。

関係する。かかわりあう。たずさわる。

角川古語大辞典)

(広辞苑 第三版以後)

Ξ

げて以降、五十七年刊の『角川古語大辞典』、五十八年刊の十八年刊の『日本国語大辞典』が、『蜻蛉日記』を用例に掲和五十一年)まで継承されていたのである。しかし、昭和四た。その状態が第二版(昭和四十四年)、第二版補訂版(昭を記すのみで、用例として『蜻蛉日記』を掲げてはいなかった。その状態が第二版(昭和四十四年)、第二版補訂版(昭に、その状態が第二版(昭和四十四年)、第二版補訂版(昭和五十一年)まで継承されていたのである。『広辞苑』は、昭和三十年の初版では、上記の現象は、おそらく戦後の『蜻蛉日記』研究の成果を反この現象は、おそらく戦後の『蜻蛉日記』研究の成果を反

たのであろうか。書において一斉に『蜻蛉日記』の用例が掲げられるようになっまにゆえ、これら昭和四十年代から五十年代にかけての辞

その背景には、

伊牟田経久氏の、精密な校訂本文に基づく

『広辞苑』第三版が相次いでそれに倣った。

「蜻蛉日記総索引」(昭和三十八年)、ついで柿本奨氏の、詳・野り日記総索引。(昭和三十八年)、ついで柿本奨氏の、詳・のではなかったか。 これらの成果が、用例検索の便をはかるのみにと成がある。これらの成果が、用例検索の便をはかるのみにと成がある。これらの成果が、用例検索の便をはかるのみにと成がある。これらの成果が、用例検索の便をはかるのみにとがある。これらの成果が、用例検索の便をはかるのみにとがある。これらの成果が、用例検索の便をはかるのみにといいある。

い語であった。
い語であった。
戦後、前記の二書をまつまでもなく、「日本古典全書」、戦後、前記の二書をまつまでもなく、「日本古典全書」、戦後、前記の二書をまつまでもなく、「日本古典全書」、戦後、前記の二書をまつまでもなく、「日本古典全書」、戦後、前記の二書をまつまでもなく、「日本古典全書」、

ない一語であったのかもしれない。

さない『蜻蛉日記』にあって、それは看過されてもやむを得な文脈に置かれていたからであろう。意味不明の本文の少なな文脈に置かれていたからであろう。意味不明の本文の少な語であると同時に、現代語の感覚、すなわち「関係する」という風に理解しても一応意味が通るようをがある。

意すべきは、「かゝはる」について施された、日本古典文学る言葉だったのであろうか。このことを考えるに当たって留日と同様、「関係する」とか「世話をする」の意で使用されしかし、『蜻蛉日記』の時代、「かゝはる」は、はたして今

る。 全集の頭注、「和文には珍しい語」という指摘 (前述) であ

文以下、『うつほ』、『落窪』、『源氏』、『狭衣』の作り物語、たしかに『竹取物語』、『土佐日記』、『伊勢物語』の初期仮名ここにいう「和文」が平安時代の仮名文を指すとすれば、

せたように『蜻蛉日記』の当該例を掲出するのは、平安、鎌いという意味で「珍しい」というべきか。「関係する、世話い故に「珍しい」のではなく、平安時代の和文には見出せなの用例は皆無である。とすれば、「珍しい」は、用例が少な『栄花物語』、『大鏡』の歴史物語にいたるまで、「かゝはる」

はる」が、文献中でいかに孤立した用例であるかは、この意そして、この『蜻蛉日記』にただ一例のみ見出される「かゝ

ある。

倉期を通しておそらく他にその例が見いだせなかったからで

語であった。

のように用いられて、

あったのは、それが和文とは位相を異にする漢文訓読語に用平安時代でも珍しい語ではなかった。「和文に珍しい語」でしかし、意味を問わなければ、「かゝはる」という語は、など、室町時代末期まで下がることからも窺われるであろう。年の『吉川家文書別集』(日本国語大辞典)や『日葡辞書』味で掲出される他の用例が『コンテンツスムンヂ』や天正九

いられる語だったからである。

すなわち、「かゝはる」は「拘」

ゃ

「繋」等の訓として用

一九六三年、東京大学出版会) 。それは、築島氏の掲げた用語」である(築島裕『平安時代の漢文訓讀語につきての研究』いられる語で、和文の「かゝづらふ」に対応する「訓讀特有

諸異生拘煩悩故 (諸ノ異生ノ煩悩ニカゝハレタルカ故ニ)

例から借用すれば

(吉K或戈隹戦侖参育(寛台15年頁点)(諸ノ男生ノ煩悩ニナメノレタルナ故ニ

(吉水蔵成唯識論巻第八寛治五年頃点)

「かゝはる」がこのような意味の語であるとすれば、

かゝる所もとりつくろひかゝはる人もなければ。

o ぎゃい ここ。 という一文は、字義通り解すること容易ならざる表現だとい

例が唯一の孤例であるが、中世の文献になると「かゝはる」前述のように、平安時代の仮名文では『蜻蛉日記』の当該わざるをえない。

物事にとらわれ左右される情況を表す

はしばしば見出される。 しかしそれらは、たとえば

定業猶医療にかゝはるべう候ば、 豈釈尊入滅あらむや。

巻三

(平家物語

るのである ろうか」のように、漢文訓読の際と同じ意味で用いられてい されるものならば、どうして釈迦が命を終えられることがあ すなわち「あらかじめ定まっている寿命が医療によって左右

彼此共に賎郎の身なりといへども、あやまたで補佐の臣 賢才かゝはらざるゆへ也。

(十訓抄 第三・一六話

日記 等の今日的な意味での使用は見られない。この事実は『蜻蛉 れた原義を離れることなく、単に 相当数見出される「かゝはる」はいずれも漢文訓読に用いら りしないからである」の意。 誤らず天子補佐の任に昇った。賢人は出自に拘り左右された これは、「傅説、呂尚はともに出自卑賤であったが、 の「かゝはる」の存否にも影響を及ぼすはずである。 以下、中世の説話、 「関係する、世話をする」 軍記の類に 道を

> 是は目にも見えず、 力にもかゝはらぬ無常の殺鬼をば暫 (平家物語 巻六)

時もたゝかひかへさず。

... と固く制しければ、 鎧を脱ぎ置いたり。聖、 資 忠、 さては制止に関はりぬと嬉しく 涙を押さへて力無く着たる

思ひて、 同 巻六)

の貴賎はなほ困窮の愁へに関はれり。 兵革しばらく静まり、天下無為に属すと言へども、

(太平記 巻二四)

ありと、老若共に驚嘆す。 公武の成敗関はるところ無ければ、 山門の安否この時に 同 巻二四)

薪とし、 狼藉手に余りて制止に関はら、獅子・狛犬をうち割りて 仏像・経巻を売りて魚鳥を買ふ。

同 巻三四)

他には仏神敬はず朝夕狩り漁を業とす、 内には将軍の仰

せを軽くして毎事成敗に関はら。

同

巻三五)

- 又大乗ノ学者ハ因果ヲワキマヘス律制ニカゝハラストテ

偏二外道ノコトク思へリ。 (沙石集 巻

大乗ハ心ヲ達スルヲ本トス。形服ニカゝハラス。 (同)

モ、愚癡ノ程オカシクコソ。 (同 巻七)文字ニカゝハラス手ニマカセテ取来コトハ是ニ似タレト

折ヲシリ時ニ随テ格ヲコエ禮ニカゝハラスシテ物ノ意ヲ

得テ振舞、コレ誠ノ達人也

同

巻 十)

ハラストイヘリ。 諸道ノ達者、ソノ道ノ意ヲ得者カナラスシモ師説ニカゝ

ヒケルナルへシ。 格ヲ越テ還テ格ニアタリテ祈念モ叶ソウトマレナマシ。格ヲ越テ還テ格ニアタリテ祈念モ叶コレコソ格ニカゝハリテフルマヒタラマシカハ、ヤカテ

このような「かゝはる」の分布を視野にいれると、時をさは見られないという現象に注目したい。いずれも和漢混淆文における用例であって、純粋の和文に

巻 四) (同 あたかも飛び地のような観を呈する。それは国語史にそぐわ における「かゝはる」の孤例は、国語史の流れに逆らって、 かのぼった平安時代に、しかも純粋の和文たる『蜻蛉日記』 の、それが本来の 日に残された写本からは明らかに「かゝはる」と読めるもの ない、はなはだ不安定な一語だとはいえないであろうか。今 『蜻蛉日記』の用語であったかどうかは大

Д

いに疑問である。

が疑わしいということになれば、その解決策の一つとして本る、世話をする」という意味の「かゝはる」という語の存在これまで見てきたように、"蜻蛉日記』における、「関係す

文改訂の可能性を探ることも許されるであろう。

見たような「かゝはる」という語の訓点語としての性格を考は「かゝはる」を「かゝづる」と改めたのであるが、前節にる」については書き入れを残していない。「かゝはる」に改『蜻蛉日記』研究に多大な寄与をした契沖も、この「かゝは板本本文に対する数多くの改訂書き入れによって、以後の

えれば、その当否はともかく「かゝはる」という本文に疑義

を呈した点は評価に値する。

『解環』とは別個の改訂案を模索する必要があろう。とはいいがたい、という二点で、それに従うのは躊躇される。「ものごとに拘る」というその語の意味では文脈に適合すること、また、仮に語としての「かゝづる」を認めるとしても、ともかく、古い用例の見えない「かゝづる」という語であるともかし、それが、築島氏が指摘した「かゝづらふ」ならば

た。

環』がその凡例で、においては、その改訂の拠り所は、先の『かげろふの日記解

さて、本文系統を異にする異本の存在しない『蜻蛉日記

ニヨリテナリ。カリテ、ヤゝ本ニ復サンヨリ外ニ又術ナキコト治定セルソノ求ムベキ手ヨリハ、万ノカナノ転訛セルヨリオシハ

解説で、とれを支持する柿本奨氏が、『蜻蛉日記全注釈』のと述べ、それを支持する柿本奨氏が、『蜻蛉日記全注釈』の

「オシハカリテ」すなわち推測によって本文批判する。によるものと考えられるので、その仮定の上に立ってこの日記の本文の乱れは、文字、とくに仮名の書体転訛

と敷衍した、字体転訛の類型以外にない。

く処理で、字体転訛の観点からだけなら一理ある改定案であったのは、「八」が「つ」に紛らわしい字形であることに基づ前述『解環』が、この「かゝはる」を「かゝづる」と改め

ずは桂宮本の字体を見ることにしよう。したがって、『解環』を超える改定案を出すためにも、ま

してろういてくろ人

も見出される。すなわち中巻天禄二年六月の記事中、実際「み」を「は(者)」に誤ること、桂宮本において他にによっては「み」または「見(み)」の崩れた形にも見える。想されるのは僻目であろうか。また「は(者)」は、見ようを字母とする「て」、もしくは続け書きされた「つゝ」が連

とみに物もいはず。

る ("蜻蛉日記全注釈」付載「誤写一覧」) 。 しかもその「は」の「とみに」は、現存諸本ではすべて「とはに」となってい

字体を熟視すると、「かゝはる」の「かゝ」二字から、「天」

らかてとしる わといんや

(桂宮本)

きるかもしれない。 あり、あるいはそこに諸本の共通祖本の面影を見ることがで 「かゝはる」の場合も、「は」は諸本おおむね「者」字母で

とらし はくろいく くるん

(彰考館文庫本

とぞつらろいてくろくて (阿波国文庫本)

(神宮徴古館本

が「とりつくろひてみる」あるいは「とりつくろひつゝみる」 から発生した字形ではないか、と推定することもあながち無 このような事例を念頭に置くと、「とりつくろひかゝはる」

謀とはいえまい。そしてその文章が、

かゝる所もとりつくろひて (つゝ) みる人もなければ悪 しくのみなりゆく。

れるであろう。 いので」という文意が、この改訂本文からは無理なく読み取 風の意味を当てがって文脈に適合させてきた、「(母の死後) であれば、従来「かゝはる」という訓読特有語に強いて後世 人手の乏しくなった道綱母邸を手入れして管理する者もいな

以上、改訂の私案を提出し、大方の批判を仰ぎたい。

注 3 注 2 注 1 以下、桂宮本は笠間影印叢刊による。 欠く。したがって大島本本文に基づいて作られた『源氏物語 今西祐一郎「歌・家集・蜻蛉日記」(新日本古典文学大系『土 大成』索引篇には、「とりつくろふ」の語は見出されない。 ただし大島本は「なかりければとりつくろふ人も」の部分を 佐日記 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記』解説 一九八九年)

が、「かゝはる」の「か」が「加」字母であり、本稿の観点か 他に、大東急記念文庫本、無窮会神習文庫本、岡山大学本も ただし国会図書館本は「は」同じく「者」字母である

日本古典文学会刊の原装複製本による。 山田清市『阿波国本 蜻蛉日記』(桜楓社) による。 国文学研究資料館のマイクロフィルム紙焼きによる。 らは、さらに字母変化を蒙った表記ということになる。

注注注 7 6 5

(いまにし ゆういちろう・本学教授)